

【翻訳】ソルブの民話5（パウル・ネド編）

著者	大野 寿子
著者別名	ONO Hisako, OHNO Hisako
雑誌名	東ドイツ文学
巻	10
ページ	34-52
発行年	2011-10
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00011388/

ソルブの民話 (五)

パウル・ネド 編
大野 寿子 訳

第二章 魔法メルヒェン (続き)

二五 森番の二人兄弟 (要旨のみ)

二六 教会の中の幽霊

二七 緑鬚

二八 小さな兄妹

二五 森番の二人兄弟 (要旨のみ)

むかしむかし父親と母親がおり、二人の息子がいた。二人の息子は森番であり、世界へ旅立とうと決心した。二人は広い荒野へとやって来て、そこで、とても古い一本のナラの木^{マユ}を見つけた。その木のもとで二人は、互いの剣を地面に突き刺し、互いにこういった。

「何年かたってまたここに戻って来よう。もしいずれかの剣が錆びていれば、その持ち主に危険が迫っていることだ。」
それから二人は互いに別れを告げた。一人はあるとても大きな町へとやって来た。その町全体が喪に服していた。ある宿屋のおかみさんが、それが何を意味するのかという彼の問いかけにこう答えた。
「町の外の大きな山に、三つ頭の竜が住んでいます。その竜に私たちは毎日乙女を一人ささげなければなりません。その乙女を竜はちぎり食うのです。今日は、町中で一番美しい国王の一人娘を、竜のところに連れて行かねばならないのです。だから、町全体が喪に服しているのです。」
まさにそのとき旅館のそばを、黒い馬に引かれ

黒い布の掛けられた馬車が通り過ぎた。そしてその葬送の車には、王女の最後の随行者の長い列が続いていた。勇敢な森番はその列に加わった。そして、王女を乗せた馬車が山の麓に到着したとき、彼は他の者たちみんなに、下で待っていてほしいと説明した。彼がまず赴いて、竜の様子を見て来るというのだ。

もう一人は、あの大きなナラの木のところへ帰り、兄弟の剣全体が錆びているのに気づいた。彼は疑問に思った。
「兄弟の身にいかなる危険が降りかかっているというのだ？」
もう一人の兄弟は出発し、自分の兄弟の結婚式にちょうど間に合った。兄弟が瀕した危険とは、竜との戦いだったのだ。そこで彼は、兄弟の結婚式に参加した。結婚した兄弟は、自分の兄弟を留めおいた。彼は義父の死後に国王となり、自分の兄弟を一番の相談役としたのだった。

『ラウジッツ―娯楽と教訓のための月刊誌』、一八八九年、四七頁より。

二六 教会の中の幽霊

森番は山を上り、竜がせわしなくあちこち飛びまわっているのを見た。森番は猟銃^{注2}を担ぎ、まさに真ん中の頭を撃ち落とした。それからもう一発さらにもう一発と撃ち、その度に、竜の頭に次々命中した。すると、その様を見守っていた山の麓に、歓喜の渦が巻き起こった。王女は解放され、それと共に町中が救われたのだ。森番は、馬車の中の王女の隣に座ることとなった。喜びに包まれて、一行は町へと帰還した。町中の鐘が、結婚式のように鳴り響いた。森番は王女を妻に迎えた。盛大な結婚式が執り行われ、それは三週間も続いた。

そうこうしているうちに一年が過ぎた。兄弟の

むかしむかし、ある町に一人の国王がいた。そこには、恐ろしい幽霊が出るという教会も立っていた。教会の扉のところには、昼も夜も見張りが立たねばならなかった。いつも、夜一〇時から一

二時の間に見張りに立たねばならない者には、悪いことがふりかかった。というのも、その者は二度と戻っては来なかつたからだ。とうとう誰も、この危険な時間に見張りに立とうとはしなくなつた。そこで国王がこういつた。

「一一時と一二時の間に教会の扉のそばで見張る勇氣のある者には、たとえそれが私の王国の半分であれ、望むものを何なりと与えよう。」

長いこと誰も現れなかつたが、とうとう一人の兵士が奮起し、国王に、自分が見張りにつこうと伝えた。その日のうちに兵士は、いわゆる死に支度のために、告解^注をし、最後の晩餐に行つた。国王は兵士に、最上の食べ物と飲み物を振舞つた。それから兵士は教会へと赴いた。しばらくの間兵士は、そこに悲しそうに立っていた。すると、小さな緑の小人が一人、彼の仲間に加わりこういつた。

「かわいそうな兵士さん、どうしてそんなに悲しんでいるの？」

兵士は小人に、自分の他の仲間たちにこれまで

つたということだ。我らが兵士ほど、喜んだ者はいなかつた。

翌朝早く、兵士に何が起こつたかを見ようと国王が自らやつて来た。国王は、自分の兵士がまだ生きてゐるのを見つけてとても喜んだ。こうして一日目の夜はうまく過ぎ去つた。

二日目の夜も兵士は、勇氣を出して教会に行つた。緑の小人がまた現われてこういつた。

「今日は、大きな祭壇の上に身を隠してな。」

兵士はいわれたとおりにした。案の定、棺が開き、魔法にかけられた王女がそこから出てきた。

彼女は兵士を殺すために、まっすぐに説教壇へと急いだ。しかし、それは無駄だつた。すると彼女は扉のところへ行き、教会中を探しまわつた。ようやく王女は、見張りの兵士が今日は、祭壇の上に乗っていることに気づいた。すぐさま彼女は彼の方に向かつた。しかし今回も彼は救われた。時計が一二時を打ち、幽霊は消えなければならなかつたのだ。国王は見張りに再度尋ね、彼がよく持ちこたえたことを知つた。

何が起こつてきたのか、そして自分の身に、これから何が待ち受けているのかを語つた。

「だつたら、だつたら、僕が君を助けられるし、助けたいと思うよ」と、緑の小人は答えた。

「君は、僕のいったとおりにすればいい。一一時少し前になつたら説教壇に上がつて、そこにいるんだ。」

小人は姿を消した。兵士は不安でびくびくしながら、扉の周りを歩きまわつた。約束の間になつた。彼は説教壇に登つた。ほどなくして時計が一一時を打つた。すると、棺が開き、その中から恐ろしい黒い女が起き上がった。彼女は、日々の生贄を今日も見つけようと、扉の方へとまっすぐ歩いていつた。しかし今回は幽霊の方が騙された。幽霊は教会中を歩きまわつたが、何も見つからなかつた。ようやく幽霊は、説教壇の上の兵士を見つけた。兵士は、もう一卷の終わりだと思つた。ところがその瞬間に、時計が一二時を打ち始めた。それと共に幽霊は、自分の棺に戻らなければならなかつたのだ。つまり、彼女の時間が尽きてしま

三番目の夜、同じ兵士が見張りについた。三度目も、緑の小人がやつて来てこういつた。

「僕のいうことを良く聞いて、昨日と同じ時間になつたら、棺のそばの、棺の蓋が開く側に横たわつてな。そして幽霊が棺から出てきたら、棺の中に入るんだ！」

兵士は今回も緑の小人のいうとおりにした。彼が棺のそばに横たわるや否や、棺の蓋が持ち上がり、魔法にかけられた王女が出てきた。彼女はまっすぐに教会の扉のところへ急いだ。彼女は、そこで誰も見つけることができなかつたので、前回と同様、説教壇の上、そして祭壇の上に行つた。

そうして彼女が自分の棺へと戻つてくると、それが閉まっているのに気づいた。しかし彼女が棺のそばに近づく前に、時計が一二時を打ち始め、力が幽霊のもとを離れていつた。

さて、魔法にかけられた王女は、自分を救つてくれたのは兵士なのだと思つたとき、兵士に心から感謝した。後に彼女は兵士の妻となつた。兵士はというと、年老いた国王の死後、王位を継承

した。

(『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、一八七五年、一八八頁より。)

二七 緑鬚

むかしむかし牧師の妻がおり、三人の娘と一人の息子がいた。娘たちは母親のもとにいたが、息子は戦時の軍務で遙か遠いところにいた。ある日、上品な若い男がやって来て、その牧師の未亡人に、彼女の一番上の娘を自分の妻にもらえないかと尋ねた。その見知らぬ男はこういった。

「私は美しい城を一つ持っています。多くの森や野や村も私の所有です。私はあなたの娘さんをもう何度も見かけました、彼女が気に入ったので、私は是が非でも彼女を妻に迎えたいのです。」

そこで未亡人は一番上の娘を呼んで来させ、彼女にこういった。

「この見知らぬ男のもとに行きたい？」

娘は「はい」と答えた。そこで見知らぬ男はこ

ういった。

「三日後に結婚式を執り行います。結婚式が終わつて、あなたは私と私の城に行くのです。」

三日後に、見知らぬ男が再びやって来て、結婚式が催された。日が暮れると、夫婦は城へと赴いた。

若い妻が翌朝目覚めると、夫は彼女のベッドの前に立ち、鍵を一二個与えてこういった。

「私は出かけなければなりません。数日後に戻ります。一一個の部屋には入ってもかまいません。ただし、この鍵で開けることのできる一二番目の部屋には入ってはなりません。もしも入ったら、あなたは死ぬことになるでしょう。」

夫が出かけた後、妻は一一個の部屋に行った。そして彼女は鍵穴を通して、一二番目の部屋の中をのぞいてしまった。その部屋の床が血まみれなのを見て、彼女はものすごく驚いた。数時間後にもう夫が帰宅した。妻はひどく不安げだった。すると夫がこういった。

「お前は一二番目の部屋の中を見たのだな。お前

はもう、永久にその中にいるがいい。」

この言葉の後、夫は妻を捕まえて、その暗い部屋の中へと髪の毛を持って引きずっていった。

それからその男はまた、あの未亡人のところへ行つてこういった。

「あなたの娘さんが病気になるました。その世話のため、別の娘さんをよこしてください。」

母親はこういった。

「わかりました。下の娘を行かせましょう。」

そして、二番目の娘は馬車の男の隣に座り、いっしょに城へと向かった。翌日、男は彼女に一二の部屋の鍵を渡したが、前と同じように、一二番目の室内をみることを禁止して外出した。

しかしながら彼女も興味津々で、一二番目の室内をのぞき見てしまった。そこで彼女は、自分の姉が死んだように床に横たわっているのを見たのだ。その後すぐに男が帰宅した。彼女があまりにおとなしいので、すぐさま彼はこういった。

「お前も一二番目の部屋の中を見たのだな。死ななきやな。」

そこで男は彼女をつかみ、姉と同様に、暗い小部屋に閉じ込めた。

それからその男は、またもや牧師の妻のところへ行つてこういった。

「あなたの二番目の娘さんも病気になるてしまいました。三番目の娘さんをよこしてください。」

夫人はこういった。

「私の娘はたまたま留守なんです。お待ちください。まもなく戻ってきます。あの子は野原にいます。あの子が戻ってきたら、あなたの願いを彼女に伝えましょう。」

ところが夫人は台所に行った。そこには末の娘がおり、その娘にこういった。

「あの男のいつていることはおかしい。お前の姉さんたちはたぶん死んだのだと思う。さあ、あの男と共に歩きなさい。そして、何も気づいてないかのように振舞いなさい。お前の兄さんに急便を送りましょう。兄さんがみんなを助けてくれますよ。」

すると、末の娘はこういった。

「わかりました。いっしょに行きます。私のエプロンを、バラでいっぱいにして持っていきます。そして、道すがら一つずつ落としていきます。そうすれば、お兄さんが道を見つけてくれることができるでしょうから。」

それから娘は、見知らぬ男のところに行つてこゝういった。

「急いで馬車の用意を！そうすれば、病気の姉たちのところへ行けますから。」

いわれたように用意がなされた。娘は母親に別れを告げ、馬車の隣の隣に座った。二人が大きな森をおりぬけるとき、ときおり彼女は、バラを一本ずつ落としたり。やがて夜なり、ようやく彼女は城に到着した。

翌朝、見知らぬ男はこういった。

「お前はもう、ここから二度と出られないよ。お前の姉さんたちは病気なんかじゃない。死んだんだ。まあ、嘆かなくてもいいからね。」

そして男は末娘にあの一二個の鍵を渡し、一二番目の部屋に入ることをやはり禁じた。末娘はし

とブラシとハサミだった。それらをすべて末娘に渡し、灰色の女はこういった。

「あなたが城の領地の外に出たら、魔法使いが追いかけて来るでしょう。しかも、いつも別の姿をして。必要だと思つたら、私があなたに与えたものをすべて、後ろにほうり投げなさい。そうすれば救われますよ。」

牧師の末娘が少しも行かないうちに、大きな一匹のブタが彼女を追いかけてきた。そこで末娘は、ブラシを後ろにほうり投げた。すると突然彼女の背後に、鬱蒼とした茂みが現われた。それゆえブタは、自分の道を切り開くの苦勞した。しかし、それも長くは続かず、再びブタは疾走し、末娘の背後に迫つてきた。そこで娘は小瓶をとり出し、自分の後ろに投げた。するとそれは大きな湖となつた。それゆえブタは、娘にたどり着くために、大きく迂回しなければならなくなつた。しかし、まもなくブタが娘の近くにせまつてきた。そこで娘は、破れかぶれでハサミを後ろにほうり投げた。ハサミの片方の端が地面にしっかりと突き刺さり、

かしながら、上の二人よりも賢かつた。すぐさま一二番目の部屋へ行き、部屋の内部に向かつてこゝう叫んだ。

「姉さんたち、生きてる？お兄さんが助けてくれるわ。」

すると一人がこゝう叫んだ。

「ええ、私たちは生きてるわ。とにかく逃げなさい。」

すぐさま末娘は城を後にした。末娘が扉から出たとき、年老いた灰色の女が彼女の前に立っていてこゝういった。

「ああ、哀れな私はずっとここにいなければならぬのです。あなたといっしょにここから逃げるのができたなら、どんなにいいか。私はもう長いあいだ魔法にかけられて、この城にいます。私はどうしても逃げるのができません。でもあなたを助けましょう。もしあなたが救われたら、私のことを思い出してください。」

それから灰色の女は、自分の吊り下げ袋に手を入れて、三つの品物を取り出した。それは、小瓶

もう片方の端が聳え立った。ブタはそれを目指して突進し、聳え立つ刃で、腹をぱっくりと切り裂かれ、死んで地面に倒れ落ちた。

末娘は、誰にも邪魔されずに母親のところへとやつて来た。そうこうするうちに、兄はもう出発して、城をめざして道を進んでいた。末娘が戻つてからほんの少したつて、兄は、二人の姉妹と共に戻つて来た。二人の姉妹は、緑鬚と他の魔法使いたちを兄が倒し、緑鬚が城に持ち帰つたたぐさんのお金を城内で発見したことを語つて聞かせた。そのとき以来、牧師の末亡人と息子ち娘たちは、輝かしく喜びに満ちて暮らした。

(フェッケンシュテット『ヴェントの伝説、メルヒエンそして迷信的風習』、二二四頁より。)

二八 小さな兄妹

むかしむかし、父親と母親がいた。二人には男の子と女の子がいた。ある日両親は、森へ薪をひろいに行き、子どもたちはそれについて行つた。

兄妹は、両親からかなり遠く離れてしまった。すると、一人の男がやって来て、兄妹を自分の陋屋へと連れて行った。そこで、二人は、何でも好きなものと好きなだけ与えられた。しかし、いつも二人つきりだった。何年も留守にしたその男は、多くの部屋を持つていた。そして、それらの部屋に興味津々だった兄が、各部屋の中を這いまわり、そこで多くの芸術を学んだ。数年が経過して、主の老人が帰宅した。しかし、数日後に、男はまた出発した。そこである朝、兄が妹にこういった。

「妹よ、僕たちはここを逃げなきゃならない。だつてあのおじいさんは、僕たちを悪魔の生贄にしようともくろんでるんだ。」

兄妹は朝早くに起き、一日中歩いた。そして日が暮れてきたとき、二人の背後から叫び声が聞こえてきた。妹は泣き出してこう叫んだ。

「お兄ちゃん、私たちもうだめだわ！」

しかし兄は、自分と妹を、美しい緑の草原に変身させた。男が走つてやつて来て、この美しい草原を目にしたとき、とても腹を立てた。

に遠くへと、一日かけて歩いた。あの老人が火を持つて戻つて来ると、教会は跡形もなく消えていた。それが彼を大変怒らせ、男はすぐさま二人を捕まえようと追いかけた。日が暮れてくると、妹がまた叫び始めた。

「お兄ちゃん、ねえお兄ちゃん、私たち今度こそもうだめだわ！」

小さな兄はしかし、自分を納屋の脱穀場に変え、妹をキビの穀粒に変えた。老人はそれを見て、オンドリに変身した。すると兄は、即座にオオカミに変身し、オンドリの頭を食いちぎった。こうして兄と妹は救われたのだつた。

『ラウジッツ人―娯楽と教訓のための雑誌』、一八六七年、一四二頁より)

【パウル・ネドによる注釈】

二五 森番の二人兄弟

この話は、E・ムツケによって報告されている。

「絶対お前たちを捕まえてやるからな！」

男はこういつて、家にいる雄ウシを連れて来ようと家に戻った。草原を食い尽くさせるためである。だが、少年の方が男より賢かった。男がいなくなるのと、草原は再び兄と妹の姿に戻り、二人はそこからさらに一日中歩いた。あの老人が雄ウシを連れて再び戻つて来てみると、草原はもう跡形もなくなつていて、草原があつた場所には湖があつた。それを見て、老人はまた兄妹を追いかけた。

日が暮れてきたとき、妹が再びこう叫んだ。

「お兄ちゃん、ねえお兄ちゃん。私たちはもうだめだわ！」

兄は自分を小さな教会に変え、妹を小さな祭壇に変えた。そこにあの老人が走つてやつて来た。ところが老人は、教会に入ることはできなかった。

「絶対お前たちを捕まえてやるからな！」

男はこういつて、家へと走つた。火を起こして教会に火をつけるためだ。

そうこうしているうちに、小さな教会は兄に、小さな祭壇は妹の姿に戻った。そして二人はさら

ムツケは、語り手のハンジャ・クラレッツツから採取した。ここでは明らかに、二人の血盟の友というメルヒェン・モティーフが不完全な形で模倣されている。このタイプにはつきものの、不思議な(あるいは特別の)誕生というモティーフが欠けているのだ。このメルヒェンは、さらに経過していく中でも、個々の部分が欠落している。だから、ナイフが生印として登場しはするのだが、結果としてそれは錆びてしまい、錆びた理由は明かされないままである。というのも、魔女に魔法をかけられるというモティーフが欠落しているからだ。それから物語は、とても自然に結末へと導かれる。このメルヒェンは、あるテキストの崩壊の一例である。というのも語り手は、素材をもとの完全な状態では、もはや把握していないからだ。

このタイプに属するのは、J・シェウチック『メルヒェンと説話―「セルボウカ」記念号』(以下、シェウチック前掲書と略記)、一〇〇頁に収録されている、小説のように誇張された物語「三本のバラ」であり、ミクワウシ・アンドリキーによって

語られたものである。この話は、モテイーフがより完璧な形で保持されている。「生きている印」としては、父親によって植えられた三本の花が登場するのである。グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(以下、『グリム童話』あるいはKHMと略記)^{註5)}では、第六〇番(KHM60)「二人兄弟」だけが、我々ソルプのタイプに属する。しかしながら、ボルテノポリーフカ『グリム兄弟』『子供と家庭のためのメルヒェン集』『注釈書』(以下、ボルテノポリーフカ『注釈書』と略記)は、我々ソルプの類話を挙げてはいない。メルヒェンの断片の一つが、ドイツのオーバールウジッツ(高地ラウジッツ)のものとして証明されているのは、F・ジーバー「オーバールウジッツの民間メルヒェン」研究(『中部ドイツの民俗学誌』所収、一九三五年)、一三四頁、第七番においてである。さらなる資料は、A・クーンとW・シュヴァルトツの『北ドイツの伝説、メルヒェンそして慣習』(以下、クーン/シュヴァルトツ前掲書と略記)、三三七頁、第一〇番「そっくりな二人兄弟」に見受けられる。

我々ソルプのメルヒェン・タイプのチェコのバリエーションは、V・ティレ『ボヘミアのメルヒェン目録』(以下、ティレ前掲書「ボヘミア」と略記)、FCFA、二二頁に報告されている。スロヴァキアのバリエーションは、J・ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』(以下、ポリーフカ前掲書と略記)第一巻、二〇二頁に報告され、ポーランドのバリエーションは、J・クジジャンノフスキー『体系的に配置されたポーランド民話』(以下、クジジャンノフスキー前掲書と略記)、第二巻、九頁に報告されている。

二六 教会の中の幽霊

人間を食べる黒い王女についてのメルヒェンは、広く伝播しており、ソルプの文学では幾度となく登場する。本書のこのテキストの報告者は、不明のままである。別の類話が、A・ラベナウ「ヴェント人のオリジナル・メルヒェン」(E・キューン『シュプレーの森とそこに住む人たち』所収)、一

二八頁の「黒い王女」に見受けられ、フェツケンシュテット『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』(以下、フェツケンシュテット前掲書と略記)、三三八頁に活字化され(「ペスト」、学術雑誌『マチツァ・セルブスカ(ソルプの母)』一八九二年、第九八号において、A・チエルニイが再話している。その中で、王女は救済された後、自分はペストであると語り消えうせる。W・フォン・シュレーンブルクは、『ハンチョーハノの伝説集』、一九一八年、二八頁、第八九番「黒い王女と水の神」で、別のバリエーションを報告している。その話では、最終箇所が竜退治のモテイーフと結びついているのである。魔法にかけられた女性が教会に出没する、また別の二つの話については、W・フォン・シュレーンブルク『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』(以下、シュレーンブルク前掲書「シュプレー」と略記)、一七三頁の「兵士と魔法にかけられた女」、および一七五頁の「教会の中の魔法にかけられた女」を参照のこと。しかしこれらは、伝説の特性を有する物語

であり、我々ソルプのメルヒェン・タイプの直接的なバリエーションではもはやない。

このタイプの作品資料については、ボルテノポリーフカ『注釈書』第三巻、五三四頁の、KHM219「棺の中の王女と歩哨」^{註6)}の注釈を参照のこと。ここでは、A・ラベナウの類話にもふれられている。スラヴの資料については、『スラヴ論叢』第一七号、五七七頁におけるポリーフカの報告を参照のこと。ザクセンの資料については、E・ゾンマー『ザクセンとテューリンゲンの伝説、メルヒェンそして風習』、一八四六年、一〇四頁「王女と兵士」に報告されている。シュレーンゲンからは、W・E・ポイケルトが四つの資料を、『シュレーンゲンの民俗』(以下、ポイケルト前掲書と略記)第四巻、三七頁以降の第五一番から五四番に報告している。これらのテキストは、第五四番「兵士と高利貸し」を除いて、モテイーフの構成上、本書のテキストに似ている。第五四番では、我々ソルプのモテイーフが、高利貸しの伝説へと挿入されてしまっている。

本質的なあらゆる点において合致しているチェコのバージョンについては、ティレ前掲書〔ボヘミア〕、三二八頁と、ティレ『チェコのメルヒェン集』(以下、ティレ前掲書〔チェコ〕と略記) 第二卷第一部、三二六頁を参照のこと。また、スロヴァキアのバリエーションについては、ポリーフカ前掲書、第二卷、一九九頁を、ポリーフカのバリエーションについては、クジジャンノフスキー前掲書、第二卷、二〇頁を参照のこと。

二七 緑鬚

この青髭メルヒェンは、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』第一卷、四〇二頁の、KHM46「フィツチャーの鳥」のバリエーションのとして書き留められている。その信憑性は、十分とはいわないまでも保障されたと見なしうる。というのも、ソルブの伝承全体を見ても、この他の資料が見あたらないからである。隣接地域においても、このタイプの資料は見出せない。他方、本書テキストであるフ

エッケンシュテットの版の直接的な出典である文学作は、いままお証明されてはいない。L・ハウプトとJ・E・シュマラー『オーパーラウジッツとニーダーラウジッツのソルブ民謡集』(以下、ハウプト／シュマラー前掲書と略記)、第一卷、二七頁、第一番「エルスベトとニワトコの木」では、バラードの形式で、青髭モテーフが題材とされている。しかしこのバラードを、我々ソルブのメルヒェンの直接的な類例とも見なすことはできない。「青髭」に対する「緑鬚」という名称は、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』、第一卷、四〇九頁によれば、他の諸々の類話テキストにも見出されるといふ。しかし、その例は挙げられてはいない。我々ソルブのメルヒェンは、その導入部において、呪術的逃走というよく知られたモテーフと結び付けられている。

チェコの青髭メルヒェンは、ティレ前掲書〔チェコ〕、第二卷第一部、八〇頁に掲載されている。悪魔あるいは盗賊が花婿として登場するスロヴァキアのメルヒェンは、ポリーフカ前掲書、第三卷、

三八四頁に掲載されている。ポーランドのメルヒェンは、クジジャンノフスキー前掲書、第二卷、二一頁に収録されている。このテキストには広範囲にわたり、「盗賊花婿」(A・アールネ／S・トンブソン『民話の話型(タイプ)』の九五五番、以下AT955と略記)が混入している。さらには、E・ヘックマンの「青髭」を参照のこと(「比較メルヒェン研究論集」、学位論文、ハイデルベルク、一九三〇年所収)。

二八 小さな兄妹

ミヒヤウ・ルーラによって書き留められたこのメルヒェンは、ソルブのメルヒェン文学の中では極めて孤立している。フェツケンシュテット前掲書、二六四頁「七人兄弟」のみ、二人の逃亡者がカモとカエルへ一度だけ変身するという呪術的逃走のモテーフが登場している。それ以外は、ほとんど見受けられないか、あまり信用できそうにないメルヒェンが登場しているのみである。

呪術的逃走のメルヒェンは、二つのグループに分けられる。一方は、逃走者の変身のメルヒェンである。もう一方は、フェツケンシュテット前掲書、二一四頁「緑鬚」(本書第二七番のテキストを参照)のように、逃走者が呪術的な道具を背後に投げるメルヒェンである。『グリム童話』においては、KHM51「めっけ鳥」、KHM56「愛しのローラント」、KHM70a「オケルロ(人食い)」、KHM113「二人の王子」に、この呪術的逃走のモテーフが見られる。変身モテーフの資料は、ボルテ／ポリーフカ『注釈書』、第二卷、五一六頁、KHM113への注釈箇所挙げられているが、我々ソルブのテキストは、そこには挙げられていない。A・アールネ「呪術的逃走」FG92を参照のこと。K・クローンによる要約「メルヒェン研究の諸成果概要」、FG96、六一頁・六七頁。

我々ソルブのメルヒェンは、とにかく逃走の描写に集中している。他方、くどくどした他のいきさつ、課題、その後のさまざまないざこざが欠けている。結末は、魔法使いとその弟子についての

メルヒエン (AT325) を想起させる。

シュレージエンからはポイケルトが呪術的逃走モティーフを伴った三つのメルヒエンを提供している。ポイケルト前掲書、一〇〇頁、第五八番「厄介な連れ」、一〇一頁、第五九番「呪術的逃走」、九九頁、第五七番「金持ちになる」を参照のこと。この中で第五七番のみが、我々ソルブのテキストに似ている。他の二つは極めて曖昧である。ウツカーマルクからは、クーン／シュヴァルツ前掲書、三一九頁、第一番「フリックじいさん」が報告されており、二人の子どもが魔法使いの支配から逃げ出し、持っていた魔法の杖で雌カモや雄カモに変身するという、よく似た内容である。このテキストにおいては、「ヘンゼルとグレーテル」との類縁性が、我々ソルブのテキストよりも顕著である。

チェコのメルヒエンにおいては、テイレ前掲書「ボヘミア」、一四三頁と、テイレ前掲書「チェコ」第一巻、二一九頁に報告されている。それらは、我々ソルブのテキストに見られる変身モティーフ

の最後の一つを除いて登場しており、「ヘンゼルとグレーテル」導入部との関連性はない。スロヴァキアのメルヒエンでは、水車小屋（ひきうす）と粉ひき、礼拝堂と司祭、バラの茂みや池と老人への変身が登場する。ポリーフカ前掲書、第二巻、一四三頁以降参照のこと。呪術的逃走の同様あるいは類似のモティーフを含むポーランドのバリエーションは、クジジャンフスキー前掲書、第二巻、二三頁参照のこと。

【訳注】

注1 Eiche (英語ではOak) は、日本語のナラ(落葉樹種群)とカシ(常緑樹種群)のいわば総称と捉えられるべき語であるが、ヨーロッパ(特に南欧以外)では落葉樹ナラを指す。日本の翻訳史上ではカシと訳された経緯があるが、ここではナラと表記する。

注2 ここでは火縄銃のようなものをイメージするとよい。

注3 キリスト教で、自己の罪を神の前で打ち明

けて、罪の許しを請うこと。懺悔や告白ともいう。

注4 「年老いた灰色の女」 Ein altes, graues Weib は、「年老いた白髪の女」とも訳しうる。しかし「こ」では、「二六番の「黒い女」「緑の小人」との色彩名称上の統一から「灰色の女」とした。

注5 グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒエン集』(初版刊行一八二二年)の第七版決定版(一八五七年)には、「メルヒエン」が二〇一話(通し番号KHM1からKHM200まで)と、「子どものための聖人伝」が一〇話(KHM201からKHM210まで)収録されている。

注6 KHM219を含む KHM211以降の話とは「こ」では、ポルテ／ポリーフカの『注釈書』第三巻に収められた話のことである。「断片」として収録されているのが、KHM211からKHM216までの六話であり、さらに「グリム兄弟の遺稿からのメルヒエン」として、KHM217からKHM225までの九話が挙げられている。

【使用テキスト】

パウル・ネド『ソルブ民話—概説と注釈を施した体系的文献一覧』ドモヴィナ出版社(パウツェン)、一九五六年。Paul Nedo (Pawet Nedo): Sorbische Volksmärchen. Systematische Quellenangabe mit Einführung und Anmerkungen. Budyšin-Bautzen (Domowina Verlag) 1956.

パウル・ネド『ソルブ民話—概説と注釈を施した体系的文献一覧』に収録されているメルヒエン全八六話中、第二章魔法メルヒエンに属する第二一五話から第二一八話まで(一一二五—一一三五頁)と同メルヒエンの注釈部(三七五—三七七頁)の翻訳を試みた。

【主要参考文献】

・学術雑誌『ソルブの母』、パウツェン(ブディシン)、一八四八—一九三七年。Casopis Matičy Serbskeje (Zeitschrift der „Matica Serbska“ = „Sorbische Mutter“). Budyšin-Bautzen 1848-1937.

- ・『ラウジッツ人—娯楽と教訓のための雑誌』
ウシエン (ブヂェイシン) 一八六〇—一八八一年。
kužican, časopis za zabavu a poučjenje (Der
Lausitzer. Zeitschrift für Unterhaltung und
Belehrung). Budyšin-Bautzen 1860-81.
- ・『ラウジッツ—娯楽と教訓のための月刊誌』
バウシエン (ブヂェイシン) 一八八二—一九三七
年。kužica, časopis za zabavu a poučjenje (Die
Lausitz. Monatschrift für Unterhaltung und
Belehrung). Budyšin-Bautzen 1882-1937.

- ・A. アールネ／S. トンプソン『民話の語型 (タ
イプ)』FFC 第一八四号、ヘルシンキ、一九
六四年。A. Arne / S. Thompson: The Types of the
Folktales. (FFC. 184). Helsinki 1964.

- ・J. ボルテ／G. ポリーフカ『グリム兄弟『子
供と家庭のためのメルヒェン集』注釈書』全

bzw. 1843.

- ・J. クジジャンノフスキー『体系的に配置された
ポーランド民話』第一巻「動物メルヒェン」
ワルシャワ、一九四七年。第二巻「魔法メルヒ
ェン」ワルシャワ、一九四七年。J. Krzyżanowski:
Polska bajka ludowa w układzie systematycznym
(Das polnische Volksmärchen in systematischer
Anordnung). 1. Bajka zwierzęca (Das Tiermärchen)
Warszawa 1947; 2. Baśń magiczna (Das
Zaubermärchen) Warszawa 1947.

- ・A. クーン／W. シュヴァルツ『北ドイツの伝
説「メルヒェン」について』ライプツィヒ、
一八四八年。A. Kuhn und W. Schwartz:
Norddeutsche Sagen, Märchen und Gebräuche.
Leipzig 1848.

- ・W. E. ボイケルト「シユレージエン地方のド
イツ・メルヒェン」『シユレージエンの民俗』

五巻「ライプツィヒ」一九三三—三三二年。J. Bolte/
G. Polivka: Anmerkungen zu den Kinder- und
Hausmärchen der Brüder Grimm. 5 Bde. Leipzig
1913-32.

- ・グリム兄弟『子どもと家庭のためのメルヒェン
集』全二巻、第七版、ゲッティンゲン、一八五
七年。H. レレケによる再版、シユトウツトガ
ルト、二〇〇一年。Brüder Grimm: Kinder- und
Hausmärchen. 2 Bde. (Bd.1. Berlin 1812, Bd.2.
Berlin 1815.) Göttingen 1857, nachgedr. u. hrsg. v.
Heinz Rölleke. Stuttgart 2001.

- ・L. ハウプト／J. E. シュマラー『高地ラ
ウジッツと低地ラウジッツのソルブ民話』
ムルリン、一九五三年。転写製版法による一八四
一年と一八四三年の二巻本の復刻。L. Haupt und
L. E. Schmalzer: Volkslieder der Sorben in der Ober-
und Niederlausitz. Berlin 1953. Anastatischer
Neudruck des zwei-bändigen Werkes a. d. J. 1841

第四巻「ブレスラウ」一九三二年。W. E. Peuckert:
Schlesiens detusche Märchen. In: Schlesisches
Volkstum. Bd. 4. Breslau 1932.

- ・J. ポリーフカ『スロヴァキアの民話集』全5
巻「マルティン」一九二二—一九三一年。J.
Polivka: Súpis slovenských rozprávok (Sammlung
der slowakischen Volksmärchen). 5 Bde. T. Sv.
Martin 1923-1931.

- ・A. ラベナウ「ヴェント人のオリジナル・メル
ヒェン」
E. キューン「シユプレーの森とそ
こに住む人たち」
「コトブス」
一八八九年所収。
A. Rabenau: Originalmärchen der Wenden. In: E.
Kühn: Der Spree-wald und seine Bewohner.
Cottbus 1889.

- ・W. フォン・シユールンブルク「ハンチヨ＝ハ
ノの伝説集」第二部「低地ラウジッツの報告」
一九一八年、一—七二頁所収。W. v. Schulenberg:

- Hantscho-Hanos Sagen. 2. Teil. Niederlausitzer Mitteilungen 1918, S. 1-72.
- ・W・フォン・シエーレンブルク『シュプレーの森にみるヴェントの民間伝説と風習』ライプツィヒ、一八八〇年。W. v. Schulenberg: Wendische Volkssagen und Gebräuche aus dem Spreewald. Leipzig 1880.
 - ・W・フォン・シエーレンブルク『伝説、習俗、慣習にみるヴェント人の民族性』ベルリン、一八八〇年。W. v. Schulenberg: Wendisches Volksthum in Sage, Brauch und Sitte. Berlin 1882.
 - ・J・シエウチツク『メルヒェンと説話—「セルボウカ」記念号』第三卷、スウシエン(ブダイシン)、一八九九年。J. Šewčík: Bajki a basnički. Jubilejné spisy Serbowki. III. zešiwk (Märchen und Erzählungen. Jubiläumsschriften der Serbowka. Bd. III.). Budyšín-Bautzen 1899.
 - ・V・ティン『チエロのメルヒェン集』第一巻、プラハ、一九二九年。第二巻第一部、プラハ、一九三四年。第二巻第二部、プラハ、一九三七年。V. Tille: Soupis českých pohádek (Sammlung der tschechischen Märchen); I. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 66. Praha 1929; II/1. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 72. Praha 1934; IV/2. Rozpravy České Akademie Věd a Umění. Tř. III, č. 74. Praha 1937.
 - ・V・ティン『ボクシムのメルヒェン目録』(FFC34) ヘルシンキ、一九二一年。V. Tille: Verzeichnis der Bömischen Märchen. FFC 34. Helsinki 1921.
 - ・E・フェッケンシユテット『ヴェントの伝説、メルヒェンそして迷信的風習』グラーツ、一八八〇年。E. Veckenstedt: Wendische Sagen, Märchen und Abergläubische Gebräuche. Graz 1880.